

凡例

- 一 外国語文献の引用にさいしては、既訳のあるものは各章末の註に出典を示した。ただし、本書の文脈に応じ、原文を参照して訳文を変更した箇所がある。
- 二 引用文内の「」は引用者による補足を示す。また、傍点は引用文に即しているが、引用者による場合は引用文の末尾にその旨を明記した。
- 三 人名の日本語表記は原則として原語の発音に近いものとした。

はじめに

ファッションの定義

私たちは言葉を通じて思考する。換言すれば、言葉は思考の道具であるとも言えよう。道具は適切に使われなければ、その使用の目的を達成することができない。マイナスねじをプラスのドライバーで回そうとしても、テレビのリモコンでエアコンを操作しようとしても、DVDをCDプレイヤーで再生しようとしても、Windows用のアプリケーションをMacにインストールしようとしても、すべて不毛な結果に終わるのみである。また、道具はその用途を果たすことができるよう適切に作られなければならない。ドライバーが直角に曲がついていたり、テレビのリモコンに温度調節ボタンがついていたりといったことはあってはならない。

言葉は明確な指示対象を必要とする。「マカロン」が卵白と砂糖とアーモンドプードルを混ぜて焼き上げたお菓子を指すこと、「寿司」が魚介を中心とするネタとシャリの組み合わせで作られたものを指すこと、「サッカー」が二組のチームによって互いにボールをゴールに運び

込もうとするスポーツを指すことなどは、言葉を使う者たちのあいだで共有されていなければ、正しく思考することもできないし、コミュニケーションが成立することもない。それゆえ、思考という行為のためには、あるいはまたコミュニケーションを成立させるには、言葉を適切に作る必要がある。しかしながら、後に詳しく述べるように、ファッションにまつわる言葉は現在のところ適切に作られているとは言いがたい。

本書が目指すのは、ファッションにまつわる言葉の定義である。と、言った途端にすぎさま註釈が必要となるのだが、実のところ「ファッション」という言葉の指示対象がそもそも明確ではない。それゆえ本章ではファッションがどのように定義——整理と言ったほうがよいかもしれない——されうるのかを検討する必要がある。もうひとつ本章で行いたいのは、衣服について思考することの意味の共有である。本書のベースになったテクストは、基本的には批評として書かれたものである。だが、それを下支えしているのはファッションに関するアカデミックな研究である。ファッション研究——近年、欧米ではファッション・スタディーズと呼ぶことが多くなっている——が現在どのような状況にあるのか、そこも議論しておかねばならないだろう。それによって、本書の射程がより明確になるはずである。

衣服について思考すること

私たちは毎日衣服を身につけて生活している。それに疑問を抱く人はほとんどいない。だが、「私たちはなぜ衣服を着るのか」、あるいは「私たちにあって衣服とは何なのか」といった問いにすぐさま答えられる人はなかなかいないはずだ。それはなぜだろうか。

衣服は私たちにとって日常的、より厳密に言えば日常的なものであり、すぎるがゆえに、その存在がことさら気にとめられることがない。私たちは生まれてすぐ衣服を与えられ、それ以降の人生のほとんどすべての時間において衣服を着て生活する。さらには、死後も棺のなかで衣服を着せられ、衣服とともに消えゆく存在である。

美術史家のケネス・クラークは、美術史における裸体の表現をめぐって次のように述べている。

英国語は、巧みに幅広くその語彙を活用し、はだか(naked)と裸体像(nude)とを区別している。はだかであるとは着物が剥ぎ取られているということであり、そこにはたいていの者ならそんな状態になれば覚えるはずの、当惑の意が幾分か含まれている。

「はだか」の説明として「着物が剥ぎ取られている」という表現が用いられているのは興味深い。というのも、一般には、「生まれたままの姿」を自然な身体とし、着衣の状態にこそ人為性が見出されると考えるのが普通だとされるからである。しかしながら、クラークはそれを反転させ、着衣の状態が自然であり、はだか（＝脱衣）の状態が不自然だというのである。生物学的な存在として人間を見るのであれば、脱衣の状態こそが自然なのだろうが、社会的な存在としての人間は着衣の状態がデフォルトであり、そこに脱ぐという行為がくわえられたのが「はだか」なのである。

そのように考えれば、「自然な身体」という考え自体が揺らいでくる。このことは近年のジェンダー論の考え方とも通底するだろう。ジェンダー論において、ジェンダーを社会的な性とし、セックスを生物学的な性とするという考えには反論も出てきている。たとえばジュディス・バトラーはセックスも社会的に構築されたという立場を取る。バトラーによれば、男性器／女性器によって性を分類するというのは、性器にのみ注目する私たちの視点が反映されているからである。たしかに、足の親指と人差し指のどちらが長いかで人間を二通りに分けることもできるし、血液型で四通りに分けることもできる。よくよく考えてみれば、性器によって人間を二分する必然性があるとは言いがたい。一般に、胎児は妊娠中の超音波検診で男性器の有無を見て性別が判断されるが、それは男性器に意味が付与されているがゆえ

のことで、そのときすでに性が構築されはじめているのだ。

裸についても同様である。私たちは生まれてすぐに衣服を与えられ、身体を隠される。たとえばこのような場面を想像してみよう。あなたの姉か妹が出産をし、赤ちゃんの顔を見に病院を訪れる。病室に入ると、赤ちゃんがベッドに裸で横たえられている。そのとき、あなたは「いま着替え中なのか」「おむつ替えをしているところかな」「これから沐浴なのだろうか」と想像する。生後数日の新生児でさえ、すでに着衣で存在することを期待されているのであって、「衣服が剥ぎ取られた状態」にはさまざまな意味が付与してしまうこととなる。つまり、私たちは生まれてすぐに着衣的存在となるがゆえに、ニュートラルな裸などとはややりえないのである。

最初の問いに戻ろう。「私たちはなぜ衣服を着るのか」という問いに対して、ほとんどの人は「着るのがあたりまえだから」「着ないと恥ずかしいから」などと答えるにちがいない。なぜなら、上述のとおり、社会的存在としての人間は着衣の状態がデフォルトであるため、それがない状態を考えることができないからだ。

哲学者のアンリ・ベルクソンが指摘するように、私たちは日常生活においていわばヴェールに覆われた状態にいる。私たちは世界のありようをそのまま受け取るのではなく、さまざまな差異をヴェールで隠して見ないようにしている。たとえば、信号機の赤は電球の種類、